

五郎治と久蔵

五郎治（1768～1848年）は魚場の取り締まりの番人であったが、日本の医学、医療史に名を刻むことになった。1807（文化4）年蝦夷地エトロフ島の幕府会所の番人小頭の時、エトロフ島に侵入したロシア船に捕えられ、オホーツクに拉致された。

ロシア抑留中、ロシア語が少し読めるようになった五郎治は、偶然から牛痘種痘法の本を入手し、ヤクツク、オホーツクで医師から種痘術を学んだ。五郎治の名を日本の医学史上、医療史の中に永久に残すことになった経緯は、吉村昭氏の小説「北天の星」（講談社文庫）では、運命のいたずらとして記されている¹⁾。5年4か月という長いシベリア抑留の後、1812（文化9）年に日本に帰国し、松前藩預かりとなった。五郎治は幕府の取り調べに際して、シベリア滞在中の克明な記録として「御申上荒増控」「異郷雑話」が残されている。種痘用の痘苗をどう入手したかは謎とされているが、五郎治が最初の種痘を行ったのは、1824（文政7）年であるという。本欄で紹介したオットー・モーニック（Otto G.J. Mohnicke：1814～1887年）から痘苗を入手した「閑叟公と種痘の像」の1849（嘉永2）年に先立つこと25年前である²⁾。五郎治は1848（弘化5）年9月27日に没した。その没後150年に当たり第99回日本医史学会が函館市で開催されたのを機に、その功績を讃える顕彰碑が建立されている（写真1）。

歴史の中には光のあたる部分と影となる部分がある。同じ時期にシベリアに拉致され、同じようにオホーツクで医師から種痘術を学び痘苗を持ち帰った久蔵（1788～1853年）は、影の代表と言える人物である。

1810（文化7）年11月に江戸に向けて大坂を出帆した観亀丸は、紀州沖で暴風に遭遇し、帆柱が折れ漂流した。75日後の1811（文化8）年2月8日にカムチャッカに漂着し、翌1812（文化9）年、ロシア側は久蔵らを日本に送還するためにオホーツク



写真1 「中川五郎治顕彰の碑」（松前公園内）



写真2 「久蔵の墓」（広島県川浦町光明寺墓地）

に移送した。偶然といえは偶然であるが、ここで久蔵らは日本に送還される五郎治と会い、この出合いが久蔵の名を歴史に残すことになった。

1813（文化10）年7月、久蔵は箱館（函館）に送還され、江戸幕府の取調べを終えて故郷の川尻に帰ったのは1814（文化11）年5月のことである。広島藩公に召された取調べの中で、牛痘種痘のタネを入れた“ビイドロ5枚”とハリ3本の用途を説明したが、その場に並みいる人々に一笑に付された。当時としては無理もないことであろう。

1853（文久元）年6月、久蔵は73歳で没し家は絶えた。吉村昭氏の小説「花渡る海」（中公文庫）では、我が国に西洋式種痘法をもたらしながら、ついに発痘の花を咲かせることなく散った久蔵の波瀾万丈の生涯を歴史の影から掘り出している³⁾（写真2）。

■ 参考資料 ■

- 1) 吉村昭, 北天の星, 講談社文庫 (2000)
- 2) 諸澄邦彦, 鍋島直正と笠原白翁, *Isotope News*, No.720, 55 (2014)
- 3) 吉村昭, 花渡る海, 中公文庫 (1988)

〔日本診療放射線技師会 諸澄邦彦〕